

リーダーとは

～名将、野村克也^氏を悼む～

野村克也氏が逝去された。選手としても監督としても一流の成績を残した人である。彼が現役時代に受けたマスコミ取材(通算 600 本塁打達成時)にて「王と長嶋は向日葵。それに比べれば、私なんかは日本海の海辺に咲くつきみそう月見草だ」と放った言葉は印象深い。そこには、ライバル達に「負けるものか」という彼の熱い魂が感じられた。



(向日葵)



(月見草)

彼のたぐいまれ類稀なる才能は見るものを「あっと」言わせた。中でも、現役引退後の監督としての活躍は目を見張るものであり、最高のリーダーであったと思っている。彼の名言として、

「好かれなくても良いから、信頼はされなければならない。嫌われることを恐れている人に、真のリーダーシップはとれない」

という言葉がある。身にしみる言葉である。リーダーシップとはそういうものだ。それに、信頼される人は誰からも好かれ、真のリーダーシップを取れるトップを嫌う者はそういないだろう。私も長年、リーダー

とは何か？と自分に問いかけてきた。その私なりの考えを皆様に披瀝したいと思います。

【「トップ」と「リーダー」】

その組織のトップになる。というのはそれなりの能力も努力も必要不可欠であり、場合によっては、キャリアや年齢にも左右される。また、自分の能力だけでなく、政治的な力関係、その他の力も働く。もちろん、トップになれる人は、ほんの一握りの限られたサラリーマンや起業した人々だけである。トップとは地位を指すもので、常に「肩書き」とともにある。そして、トップは常に組織の責任を背負う立場にある。

【「トップ」に対して「リーダー」とは】

リーダーは、トップの地位としての責任だけではなく、人間性、指導力、志、意欲、哲学やそれらを伝える言葉等すべてが必要である。組織の中で「トップ」に立ったからといって、その人物が必ずや組織の「リーダー」としてふさわしい仕事ができるかどうかは、別問題である。

【「自己犠牲」の精神！（私欲をなくす事）】

組織のメンバーは、「トップ」に対して良き「リーダー」であることを期待する。そして、リーダーの資質とは正に「自己犠牲」だと思う。「自己犠牲」って聞くと生々しい感じがするが、良いリーダーになろうと思うのであれば「必要な資質」である。人が嫌がりそうなことは率先してやる。責任の重い仕事ほど自分がやる。そうやって、仲間からの信頼と尊敬を集

めていくわけである（不思議なことに、率先してやった仕事のスキルと人脈は、すべてやった人の財産となって積み上がって行くことになる）。

人に嫌なことばかりやらせて、責任の重い仕事も人に押し付けて、成功すれば自分の手柄、失敗すると人のせいにするということをしていれば、仲間はずれて来ないのは当たり前だ。ついて来ないどころかその組織から相手にされなくなる。

しかし、自分を犠牲にして苦しい思いをするくらいならリーダーなんかなりたくない。そんな風に思う人もいると思うが、それは「リーダーの自己犠牲」について良くわかっていないということだ。そういう人は管理職（先導する立場）を早く辞めて平の仕事（先導される立場）についての方が自分と組織のためである。



↑暗き道でも、道なき道でもリーダーは集団を先導しなければならない！

【優秀なリーダーの自己犠牲とは？】

その言動で仲間たちの心を動かし「もっとリーダーのために働きたい」「仲間のために働きたい」と思わせることができる人間になること。それがまたリーダー本人を幸せにして、仲間たちもまた幸せにする。

実話であるがゆえに名前を伏せるが、かつて某プロ野球球団に、某エースがいた。このエースは、優勝争いの天王山の試合終盤、『彼を投入すれば勝てる』という場面でも投げなかった。本人が、『無理をして怪我をしたら誰が面倒を見てくれるんだ』と言ったから監督は登板させなかったという。このチームは優勝を逃し、この振る舞いがもとで周囲から信頼されなくなった某エースは、その座を滑り落ちることになる。チームの誰もが某エースが登板するとモチベーションが無くなり、結果勝てないのである。やがて、某エースを盛り立てようという周囲はいなくなったという。



つまりは、リーダーが私欲を捨てて自己犠牲を払うことは、最終的にはリーダー自身の幸せに繋がるということである。言葉を選ばずして言えば、リーダーは自分のために自己犠牲を率先しなければならないということだ。だからポジティブな考え方をすれば、決して自己犠牲は苦しいことでも無いし、批判すべきことでも無いのである。「情けは人のためならず」ということわざがあるように、自己犠牲の精神もまた、私心(私欲)をなくし他人のために行うことにより、やがて自分の所に返ってくるということを理解しなくてはならない。

【必要とされないリーダー】

自分を中心に考え、自分のやりたいことだけやる。やりたくないことはやらない。そんな人は周りからも必要とされなくなり、次第にどんどん苦しい思いをするようになって行く。リーダーの立場に限らずとも、誰もが同じことが言える。世のため、人のためにと思っただけで行動できる人、他人のためにお金を使える人が、必ず幸せになることができるということを忘れないで欲しい。

【リーダーの資質】

従来からの公務員の職場は、つい最近まで年功序列が当たり前でした。だからトップとリーダーの理論も分かっていない管理職がたくさんいる。しかし、町のために、町民のためにと思えるリーダーがいてこそ、組織は目標に向かって動き出



す。自己犠牲の精神がある人は、次の3つを備えたリーダーを目指すべきである。それは自己犠牲のほかに、『意欲』『能力』『人格』である。仕事は何であれ、リーダーは成果を出さないといけない。とすると、行動力を含む『意欲』、そして仕事をマネジメントし、新しい境地を思い描けるだけの『能力』は必須だ。さらに、この人についていきたいと思えるだけの『人格』がなくてはリーダーとはいえない。そのため、『意欲』『能力』『人格』の3つが揃わなくてはならないのである。

そしてリーダーは、学び続け、成長し続けなくてはならない。その姿を見て、部下や組織のメンバーも学ぶ。「率先垂範」もリーダーの重要な役目だ。巨人のV9時代を支えた王貞治氏と長嶋茂雄氏の現役時代について、「ON（王・長嶋）は練習でも一切手を抜かない。球界を代表するあの2人があれほど練習している。だから自分達だってやらないわけにはいかない。だからこそ巨人軍は強いのだ」という話を聞いたことがある。やはり「率先垂範」は組織を強くする。

業務上の専門知識はもとより、リーダーとして、さらに高度であるマクロ要因、社会トレンド、住民動向、自社(町)の置かれている状況、自社(町)の経済成長の戦略等を十分に理解して手を抜かないこと。それが大事である。

リーダーとして立つ人格者は誠実であり、柔和であり、正義を貫き、自己犠牲の精神を持つ。その上、謙虚で自分の社会的地位や年齢に囚われることなく誰とも真摯に向きあい、誰の話も丁寧に聞いてくれる。礼儀を持って接することが出来る。また、言葉は穏やかで、怒ることも怒鳴ることもない。一方で目標は高く高潔であり、自己の使命を認識し、ぶれない軸を持ち、力強い。それが古今東西を問わず、慕われるリーダーとしての人格者の姿ではないだろうか。

私は町のトップそしてリーダーとして、部下（次世代のリーダー）の育成をするという大切な仕事を、これからもたゆまなく続けていく。そうすることが、この明和町を素晴らしい町、住みやすい町に出来る秘訣と心得て、これからも日々奮闘することを誓ったのである。

そして、最後にもうひとつ野村氏の名言を！

「金を残すは3流、名を残すは2流、人を残すは1流」

名将 野村克也氏 享年84歳 合掌

令和2年3月6日

明和町長 富塚もとすけ